

氏名	やまさき やすひろ 山崎 泰寛
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博甲第678号
学位授与の日付	平成25年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 造形科学専攻
学位論文題目	1950年代のニューヨーク近代美術館が日本の建築界とデザイン界に与えた影響に関する研究
審査委員	(主査)教授 松隈 洋 教授 石田潤一郎 教授 中川 理

論文内容の要旨

本論文では、1950年代にニューヨーク近代美術館(MoMA)が関わった建築とデザインの展覧会3本を事例に、MoMAの建築・デザイン部門が日本の建築界とデザイン界に及ぼした影響を検討した。建築の展覧会の多くは実物を展示するものではなく、写真や図面、模型のような二次的な情報で構成され、そういった情報を媒介として展覧会の意図が観客に伝えられる。そのため、展覧会を企画する美術館やキュレーターの意図が重要な意味を持つと言える。これまで建築史で明らかにされてきた建築物や建築家の歴史にとどまらず、建築やデザインと社会を接続する回路として展覧会を扱い、立体的な歴史を描いた研究でもある。なお、調査に際しては、文献調査と関係者へのヒアリングを実施しつつ、MoMAや東京国立近代美術館などに所蔵される一次資料に直接あたっている。

第1章では、日本の国立近代美術館とMoMAの関係に焦点を当て、日米両国の政治的均衡の中で美術館を介して育まれた関係を明らかにし、各々の国でキュレーターがどのような役割を担っていたのかを論じた。

第2章では、1954年～1955年にMoMAで開かれた書院造り「松風荘」の実物展示である「日本家屋展」を通じて、調査や企画といった業務と、建築家への敬意を払うキュレーターの姿勢を明らかにした。キュレーターとしてのドレクスラーは、現地調査を敢行し、日米双方の関係者と調整を繰り返しながら、建築家の立場を尊重しつつ毅然とした要求を出し、展覧会を成功に導いたことが明らかになった。この展覧会では、キュレーターの役割として、調査力、企画力、説得力、建築家への敬意の存在を指摘することができた。他方、MoMAの日本建築の取り上げ方に対して、日本人の建築家やデザイナーらの批判的な反応が存在したことも明らかになった。

第3章では、1953年末～1958年にMoMAが実施した建築写真展「日本建築展」を通じて、日米両国の間に横たわった日本建築観の差異を論じた。同展は北米で足掛け5年間にも亘る巡回展として成功を収めた。展示する作品の選考プロセスにおける、日米両国の主張の様相を、選定委員会の議事録や手紙などによって検討した。MoMAは古建築主体の写真展を企図し、日本側は近代建築の紹介を求めたが、結局MoMAは意図を曲げなかった。しかし、展覧会の高い評価を背景にして、日本側は、MoMAが外した日本の現代建築を含めた英文の建築写真集を出版した。書院

造りの「松風荘」は日本の関係者の失望を招いたが、写真展においては MoMA の拒否反応を別の形で切り開いたのである。

第 4 章では、1957 年に国立近代美術館で開かれた「20 世紀のデザイン」展の歴史的な位置づけを通じて、MoMA のキュレーターの交代劇が日本のデザイン展に及ぼした影響を明らかにした。特に、日本で最初の本格的なデザイン展として企画された「日米のグッドデザイン展」が、MoMA の意向で近代デザインの歴史を回顧する展覧会へと変貌を余儀なくされた過程を明らかにした。1950 年代初頭にアメリカを訪れた日本人デザイナーらは、商業的な価値を称揚する MoMA の「グッドデザイン展」に感銘を受け、日本でも同様の展覧会の実施を求めていたが、その希望が叶うことはなかった。

第 4 章では、その理由を MoMA 内部のキュレーターの交代劇に見出した。新しいキュレーター（アーサー・ドレクスラー）は、工業デザインを展示する水準を、歴史的な重要性と高い品質の 2 点に置いていた。一方、前任者（エドガー・カウフマン Jr.）は新作からのみ展示作品を選定しており、両者の基準は根本的に相容れなかった。ドレクスラーは MoMA 史上初めて収蔵品による展覧会の実施にこぎ着け、MoMA のデザインコレクションの基準を確立したのである。さらに本展について、日本のデザイン関係者のほとんどが「グッドデザイン展」と呼び、本展の真意が理解されたとは言いづらいことを示した。

また、補論として、キュレーターとして日本側との交渉の矢面に立つドレクスラーが終始一貫した態度を保持し、判断を下していたことを示した。ドレクスラーは、後の歴史に影響を与えうる作品を歴史的に重要だとみなし、それが高い品質で実現されていることを求めた。それは、展覧会自体に後年につながる歴史的な重みを持たせることにつながり、MoMA での展覧会が彼自身にとっての作品にほかならなかったことを指摘した。

以上の論究を元に、日本の建築界とデザイン界に、ドレクスラーを始めとする MoMA の建築・デザイン部門が与えた影響を考察した。建築界は MoMA で実施された展覧会を通じて、日本の近代建築の独自性により自覚的になった面がある。デザイン界では、ドレクスラーがグッドデザインを拒絶したことが日本の関係者の自覚を焚きつけ、むしろ日本独自のグッドデザイン運動を推進する燃料となった可能性を指摘した。また、MoMA が工業デザインの美的側面を重視したことが、日本の美術館における工業デザイン展の性格を形作ったことを推察した。

論文審査の結果の要旨

日本で近代を扱う最初の国立の美術館である国立近代美術館が開館したのは 1952 年のことであり、その範とされたのが 1929 年に開館したニューヨーク近代美術館（MoMA）である。本論文では、1951 年から 35 年間にわたって MoMA の建築・デザイン部門のキュレーターを務めたアーサー・ドレクスラー（1925～87 年）の仕事に注目し、彼が MoMA で企画して開催した日本の建築に関する二つの展覧会、「日本家屋展」（1954～55 年）、「日本建築展」（1953～58 年）と、彼の指導の下で日本の国立近代美術館で開催された「20 世紀のデザイン：ヨーロッパとアメリカ」展（1957 年）における日米関係者のやり取りを通して、1950 年代前半期における日米の建築観やデザイン観の差異を具体的に明らかにしようとするものである。

これまで、個別の展覧会に関する研究はなされてきたが、キュレーターの役割に重点をおいたものは皆無だった。また、具体的な展示内容をめぐるやり取りの中に、日米の同時代の建築とデ

ザインの見方の相違を読み取るという研究もほとんどなかった。そのことによって、多くの新しい知見を見出したことは特筆される。そして、何よりも戦後日本の建築とデザインの世界の枠組みを形づくったものが何だったのかについて、本論文は新しい研究領域を切り拓くものとなっている。さらに、萌芽的ながら、1957年に通産省が創設し、今も続いているグッドデザイン商品選定制度や、戦後の1950年代に建築界で展開された伝統論争などの歴史的な意味を論じる上でも、本論文は基礎的な視座を提示するものとなっている。

以上のように、本論文は、ニューヨークのMoMAや東京の国立近代美術館が所蔵する原資料を詳しく調査し、そこから新しい知見と歴史像を提示したという意味で、きわめて重要な貢献を果たすものと評価できる。

尚、本論文の基礎となった論文は、査読済みの審査論文(1)(2)と、査読中の審査論文(3)の3編であり、いずれも申請者の執筆である。

- (1) 山崎泰寛, 松隈洋「ニューヨーク近代美術館「日本家屋展」に見るキュレーターの役割——アーサー・ドレクスラーの仕事を中心に」『日本建築学会計画系論文集』Vol.78, No.688, 2013年6月, pp.1441-1446
- (2) 山崎泰寛, 松隈洋「ニューヨーク近代美術館「日本建築展」に見る日米の日本建築観の差異——1950年代の構図」『日本建築学会計画系論文集,』 Vol.78, No.691, 2013年9月, pp.2077-2082
- (3) 山崎泰寛「20世紀のデザイン：ヨーロッパとアメリカ」展の開催経緯と位置づけ——1950年代におけるニューヨーク近代美術館及び国立近代美術館のデザイン展と「グッドデザイン」の考察から」『デザイン学研究』, 日本デザイン学会(査読中)